

# SEED (シード)

Vol.005  
2022.10月

令和4年度「駒大生社会連携プロジェクト」もいよいよ折り返しとなりました。今号では、5つのプロジェクトの9月・10月の活動内容をメンバーからレポートをしてもらいました。また「駒大生社会連携プロジェクト 合同学生インタビュー」の様相もお届けします。

〔産官学連携部門〕

## 産学連携による新商品開発と新たな販路開拓の実践プロジェクト（経済学部：吉田健太郎先生）

私たちは、伝統地場産業の持続的な成長と発展のため、京都の老舗菓子地場企業である「石田老舗」様と連携し、海外販路開拓プロジェクトに取り組んでいます。具体的にはマレーシア市場の開拓向けのスイーツの商品開発と販路開拓戦略の立案を行っています。

今般、本プロジェクトに関わるフィールドワークを9月25日～27日にかけて京都で行いましたのでご報告します。

まず、石田老舗様の本社を訪問し、本プロジェクトのために編成頂いた海外販路開拓戦略チームの顔合わせと打ち合わせを行いました。次に、関連施設や工場で参与観察を行いました。最後に「ジェットロ京都」様を訪問し、資料収集と聞き取り調査を実施しました。

チーム会議においては目的や問題意識の共有、ゴール設定を行う事ができました。参与観察では同社の強みを発見する事ができました。聞き取り調査では海外進出における成功要因と政策支援活用の可能性について探ることができました。



〔産官学連携部門〕

## 難民を知り、共生へ ～クルド人に学ぶ～（法学部：三竹直哉先生）

三竹ゼミではクルドの方々を知るために、9月初旬に埼玉県蕨市と川口市に足を運びました。クルドの子どもたちへの日本語学習を支援しているカフェ「ココシバ」様からお話を伺いました。また、クルド文化を料理の面から知るために、料理会をゼミ生で行いました。



当プロジェクトの  
Instagramはコチラ



現在、新型コロナウイルスが収束していないことから、対面形式での上映会を開催できない事態を鑑み、オータムフェスティバル期間以外で、上映会の学内開催を検討しています。「東京クルド」の上映会を通じてクルドや難民問題を知ってもらえるよう、私たちは現在パンフレットの作成に尽力しています。クルドや難民に親しみを持っていただき、難民との共生に一步でも近づけるようパンフレットを通じた情報発信を行います。

今後開催予定のイベントの詳細は当プロジェクトのInstagramでご確認ください。

〔世田谷区部門〕

## 動画制作を通じた「せたがやの居場所」発信プロジェクト（経済学部：松本典子先生）

9月30日にNHKサービスセンターの星野さんから、『取材勉強会』として、取材の仕方を教えていただきました。取材の心得やヒアリングの手順だけでなく、例題として、実際に、取材する立場になったつもりで、自分ならどうするかをゼミ生ひとりひとりが考えることができたので、とても有意義な勉強会になりました。

10月14日にオンライン・ワークショップを行いました。星野さんから、動画制作における『構成』についてガイダンスをしていただきました。取材の映像や情報をポストイットに整理しながら、構成を考えていくことで、わかりやすく組み立てていくことができるということを学びました。

今後は、各グループで取材を開始し、構成表の作成を行っていきながら、10月末に星野さんから『撮影勉強会』として、撮影の仕方に関する講義をしていただく予定です。



〔世田谷区部門〕

## 地域プロジェクトによる市民育ち—用賀と深沢における参加型調査研究（文学部：李妍焱先生）

現在は「地域プロジェクトによる『市民育ち』の可能性」について研究するため、市民的活動の経験のある様々な方にインタビューを行っています。「用賀サマーフェスティバル」でお世話になった「NPO法人neomura」の新井さんの協力によって、様々な方のお話を聞くことができ、毎回刺激を受けています。



「ふかさわの台所」では、今月19日に「おとなの語りBAR」を開催しました。本企画は、ゲストの方に学生が料理をふるまい、お話を聞くというものです。食卓を囲むことで会話が弾み、交流も深まります。今回のゲストは、世田谷区議会議員の中山みずほさんです。普段、学生に接することの少ないであろう区議会議員の中山さんが何を語ったのか、お話の内容は李ゼミのnoteにまとめますので、気になる方は是非読んでみてください。

P B L 型授業のモデル構築 – 世田谷発の起業家教育 – (経済学部：長山宗広先生)

経済学部の2022年度新規開講科目「アントレプレナーシップ養成講座」のなかで連携した株式会社アザイ・コミュニケーションズ(代表取締役 久木田寛直)が、受講生のうち有志の学生と共に「世田谷デジタルものづくりフェス2022」の開催に向けて準備しています。

このイベントは、オータムフェスティバルの日程に合わせ、11月5日・6日の2日間、本学駒沢キャンパス3号館の種月ホールにての開催を予定しています。学生主体の「世田谷デジタルものづくりものづくりフェス実行委員会」主催のもと、本学経済学部現代応用経済学科ラボラトリが協賛に加わっています。

経済産業省が発表した「未来人材ビジョン」には、デジタルを活かすことで、場所・時間・年齢を問わず、誰でも世界に広がる本物の社会課題に向き合い、探究学習を始められる環境の提供が必要だと記されています。デジタルを理解し、その特徴を知ること、アナログとの使い分けを自らが考えていく時代です。そのような教育の鍵となるイベントが、「世田谷デジタルものづくりフェス」です。フェスのコンテンツとしては、主に小学生向けのもの、「VEX GO・VEX IQ体験会」「makeX 体験会」「VIVITA体験会」「VEX IQ スクリメージ」「TRUST LESS LIFE 体験会」「3Dプリンターでコマ制作ワークショップ」「マインクラフトの世界に駒澤大学種月館を建築しよう」などの企画を用意しています。

また、オープニング企画(11月5日、12時~13時)として、Windows95の父・中島聡氏による「Web3とは?」と題した特別講演会を開催します。

こちらは大学生向けのものです。参加希望者は、<https://forms.gle/6jCYuRWyuQipmx766>のフォームに入力ください。詳しくは、HPをご覧ください。<https://sdmf.jp/>



← 世田谷デジタルものづくりフェス HP

特別講演会「Web3とは? (中島聡氏)

参加予約フォーム →



〔社会連携センター：プロジェクト見学レポート〕

## 令和4年度 駒大生社会連携プロジェクト 合同学生インタビューを開催しました。

10月14日（金）に、駒沢キャンパス3号館9階912教場で、今年度の採択プロジェクトのメンバーである学生を対象に、社会連携センター主催の【令和4年度 駒大生社会連携プロジェクト 合同学生インタビュー】を開催しました。

今回は7つの採択プロジェクトから下記の4プロジェクトにご参加いただきました。

- ・松本 典子 先生のプロジェクト
- ・李 妍焱 先生のプロジェクト
- ・吉田 健太郎 先生のプロジェクト
- ・三竹 直哉 先生のプロジェクト

このインタビューの様子を、今号と次号の2回にわたってお知らせします。



### 令和4年度駒大生社会連携プロジェクト合同学生インタビュー（その1）

#### ● 連携先に飛び込んで「自分事で活動」

- 皆さん今日はお集まりいただきありがとうございました。  
初めに、皆さんのプロジェクトの活動内容を紹介してください。

#### 松本 典子先生プロジェクト（以下、松本P J）：

私たちのプロジェクトは、世田谷区内で地域の人たちが集まれる「居場所」をつくっている福祉・まちづくり系の市民活動団体などに取材・ロケを行って、メディアの専門家の支援を受けながら、動画を作成します。最終的にはその動画をNHKの『ステラネット』というサービスに掲載し、「世田谷の居場所の今」を、地域・全国・そして国外に伝え、地域のアーカイブとして蓄積していくことを目的としています。



ここでいう「居場所」とは物理的な意味に加え、心理的な「居場所」という意味もあります。

地域の人たちが「居場所」に集まる理由の1つに、そこに集まれば顔のみえる関係性があり安心感が得られる、ということが挙げられます。コロナ禍で、人と人が分断されつつある社会において、「居場所」を運営している人の役割は非常に大きくなってきているといえます。動画編集をする際、「居場所」をつくらせている人が、なぜその「居場所」をつくらせてきたのか、ということ意識しながら活動に取り組んでいます。

#### 李 妍焱先生プロジェクト（以下、李P J）：

私たちは、「地域に主体的に参加する市民を、いかにして育成することができるか」というテーマで研究をしていて、おもしろい取り組みをしている大人たちが、地域を舞台に仕掛けているイベントや、プロジェクトに実際に参加しています。

今回は、深沢にある『ふかさわの台所』で営まれているコミュニティへの参加、そして用賀で行われる『用賀サマーフェスティバル』という夏祭りのイベントの企画や運営に携わりながら、市民を育てるためのヒントや要素を探っています。



### 吉田 健太郎先生プロジェクト（以下、吉田P J）：

私たちは、「地域活性化」「商品開発」「販路開拓」の3つの目的に分かれて研究していて、今回は4つのプロジェクトが動いています。マレーシアでの販路開拓に向けたシュークリームの商品開発や、静岡県のお茶の製造元と茶摘みなどの体験型観光を切り口としてお茶の販売につなげるための商品開発を行っています。



また、佐賀県にある『SAGA COLLECTIVE（※1）』と連携して佐賀の地域活性化に向けたコラボや、フィリピンの企業と連携し、学生と企業の双方が成長するインターンシップの検討などを行っています。  
※1…佐賀県を代表する地場産業や伝統産業の異業種11社からなる協同組合

### 三竹 直哉先生プロジェクト（以下、三竹P J）：

我々は「難民問題」について研究しています。その中で様々な問題を知って我々が一緒に暮らすためにはどうしたらよいか、を勉強している最中です。今後は、ウクライナからの「避難民」の方へのスムーズな対応とは異なり「難民」の方にはスムーズな対応がとられていない、という問題についても広げていきたいです。



このプロジェクトでは「難民問題」とはどんなものかを知ってもらうことを目的に大学内で『東京クルド』という映画の上映会を計画しています。この映画の監督による講演会も企画していて、このような活動を通して私たちができることを発信していきたいと思っています。

### ●地域や企業に必要とされる「人材」

—プロジェクトを進めるなかで出会った、インパクトのある人物を教えてください。

#### 松本P J）：

私たちが出会った、インパクトのある方は『NHKサービスセンター』の星野豊さんです。星野さんはNHKのアナウンサーで、長年様々な番組に、アナウンサーとしてだけでなく企画から携わっておられ、現在は用賀にあるNHKサービスセンターに所属されています。私たちは星野さんのご指導のもと動画づくりのノウハウを学んでいます。企画、構成、動画の撮り方、発信の仕方などについて隔週で講義を受けてプロジェクトを進めています。星野さんは、説明や教え方がとてもお上手で、頭に入ってきやすいです。過去の番組づくりのご経験を交えながら、注意すべきポイントやアドバイスを教えていただきさすが物事を伝えるお仕事をされているアナウンサーの方だな、と思います。

#### 李P J）：

深沢で地域コミュニティ『ふかさわの台所』を運営されている成見さんご夫妻です。ご夫婦はご実家が地方にあって、子育てをする際に、地域に頼れる人がいないことをきっかけに「仲のよい近所さんをつくる場」を自ら作り出した方なのですが、それが結果的に地域のコミュニティとなって地域のためにつながっている、と伺いました。私は、このような地域プロジェクトは、「地域のために」という精神が先にあるプロジェクトを始める方が多いのかなと思っていましたが、成見さんご夫妻のように、自分事から課題を発見して、解決に動いていった結果、地域のためになった、という例をはじめて知りました。社会課題はネットなどで調べていけばたくさんあると思いますが、まずは自分が住んでいる地域や、自分が過ごしている暮らしの中での課題やモヤモヤを見つけることから始めていけば、それが結果的にみんなのためになることもあるのではないかと思います。

もう1人は『用賀サマーフェスティバル』の発起人でありつつ、今回はアドバイザーとして私たちを支えてくださった新井佑さんです。『用賀サマーフェスティバル』は学生主体のお祭りなのですが、新井さんは学生のやりたいこと、実現させたいことに対してアドバイスをくださり、私たちの意見に寄り添って地域を盛り上げるために熱量をもって推し進めてくださいました。お祭り当日は新井さんのエネルギーを受けて、私たちもいつも以上のやる気になりました。

### 吉田 P J :

私は『SAGA COLLECTIVE』に所属する家具の会社『レグナテック』の社長さんです。自社に対する想い、家具を通してお客様に伝えたい想い、そして佐賀に対する想いと、強いリーダーシップが感じられました。素晴らしいリーダーシップを間近で見て、こういった方が地域や企業に必要とされる人材なのだと勉強になりました。

### 三竹 P J :

埼玉県で『ココシバ』というカフェを運営している小倉さんと、そこで日本語教師としてクルド人の方に日本語を教えている小室さんです。埼玉県蕨市という地域はクルド人の方が多く居住している地域であり、『ココシバ』にはクルド人の方が日本語を学びに来ています。

お2人とも心の温かい方で、心の底から難民として来られた方への当事者意識を持たれています。私たちが実際に伺った際に、親世代だけではなく、こども世代にも配慮されていて、日本語の他にも、学校の課題や学習の支援など、様々な幅広い支援をされている姿を目のあたりにして、私たちももっと当事者意識をもってこのプロジェクトに取り組まなくてはいけない、と思いました。



### ● 聞くチカラ・伝えるチカラ・実行するチカラ

ープロジェクトを進める上で、必要だなと思ったスキルを教えてください。

### 松本 P J :

このプロジェクトのゴールは動画を世に出すことです。動画を作成するためには、どのような動画を撮るか、どのようなシーンが必要かを考えるために事前インタビューが必要です。その際「相手から話を聞き出すスキル」が一番必要だと思いました。

今日も先ほどまで、星野さんの同席のもとオンラインで事前インタビューをしていました。事前に準備してきた質問は話を聞き出すことができましたが、プラスアルファの質問については聞き出すことが難しく、その後、星野さんが話を聞き出しておられ、やっぱり違うなと思いました。これまでもゼミ活動でインタビューを行ってきましたが、相づちや、話と話の間（ま）のつなぎ方など、まだまだ実力不足を痛感しました。

### 李 P J :

「コミュニケーションスキル」の必要を感じました。

『ふかさわの台所』でのプロジェクトでは参与観察する場となるイベントを自ら企画して実行までもっていくので、様々な立場の大人たちからの協力が必要となります。とくに『ふかさわの台所』のことを知らない人と連携するときは、イベントの意義や可能性などを言語化して共有することが求められ、難しいと感じています。

『用賀サマーフェスティバル』の活動では、密な連絡、こまめな情報共有が求められ、成功のために常に全員が同じ方向を向いていくことの大変さを感じました。

### 吉田 P J :

「コミュニケーションスキル」と似ていますが、「相手の話を聞く力と、こたえる力」が大事だなと思いました。

私たち学生は、企業・経営者の方とは立場も考え方も異なるので、商品開発の会議では私たちの意見がなかなか伝わらなかったり、先方の考えていることが自分たちの中で解釈できなかったりと、そういったところから認識のズレが出た場面もありました。

そこで「共通言語」をつくるために、相手の意見を聞きながら、自分たちの意見も伝えていくことで会議が進みやすくなり、お互いが理解しやすくなりました。

### 三竹 P J :

プロジェクトを進める上で大事だと思ったポイントは「計画性」と「実行する力」です。

映画の上映会開催に向けて、いろんな人に会う、大学に許可を取る、映画監督の方にスケジュールを確認する、といった、いつまでに、何をするかという計画が大事と痛感しています。

また計画を立てただけで頓挫したことや上手くいかなかったこともありました。計画したことは実行していかないと、どんどんズルズル後ろにいついてしまっていて厳しくなってしまう、ということはこのプロジェクトで経験しているので、上手くいかなさそうになったら、仲間とミーティングを行いどうしたら上手くいくかを考えながら進めています。



今号はここまで。

次号第6号では、プロジェクトから、プロジェクトへの学生インタビューの模様をお届けします！